総合的な学習の時間　学習指導委員会研究のまとめ

地域のよさを実感し，自らかかわろうとする総合的な学習の時間のあり方

Ⅰ　研究テーマ

地域のよさを実感し，自らかかわろうとする総合的な学習の時間のあり方

Ⅱ　研究テーマによせて

地域に根差した素材，地域に所縁のある方々との触れ合いは，子どもたちの学びを支え飛躍させてくれるだけでなく，自分の育った土地への愛着を深めてくれる。我々はその地域性を大事にしつつ，同時に子どもたちが自分から課題を持って活動する姿を求めて実践を積み重ねてきた。本稿では各学校からの実践を報告したいと思う。各校とも，子どもたちの願いと地域性とを大事にした実践を展開している。今後の学習指導の一助になれば幸いである。

Ⅲ　各校の実践

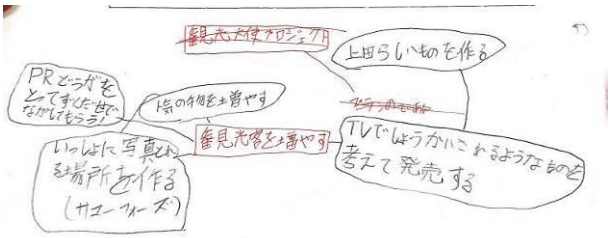
１　実感を伴って地域の良さを学ぶ　　Ｋ小学校

（１）テーマ設定の理由

昨年度の総合的な学習の時間では,「自分たちの好きな上田市の観光客を増やしたい」という思いから，上田市のオススメスポットを集めた旅行パンフレットを作成した。子どもたちはこの活動を通して，上田市の魅力を再認識することができたが，インターネットを中心とした調べ学習にとどまってしまい，実感を伴ったものにはならなかった。

そこで本年度は，子どもたちが五感を働かせながら学習を進めることで，地域に対する認識をより深めることにつなげたいと考えた。

（２）活動の経過



①活動の決め出し

昨年度の活動からの広がりを考えるために，一人ひとりが右のようなイメージマップを書きだした。お互いの書いたものを見合う中で，クラスで取り組みたいことや活動に対する思いについて話し合いを行った。そういった話し合いを通して,「食」をテーマに上田市を PR しようということが決まった。

②地域の農産物に興味をもつ

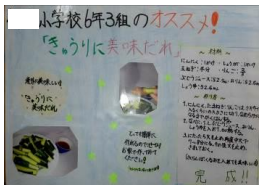
学校の隣には農産物直売所があり，そこを見学することで，地域ではどういった農産物が作られているかを知りたいという意見が出た。実際に見学に行ってみると売られているものの多さや，地域で多くの人が農産物を生産していることに驚く児童の姿があった。そして「上田の農産物の良さって何かな」「生産者さんはどんなことにこだわっているのか」といった疑問が児童の中に出てきた。

③インタビューを通して理解と思いを深める

農産物を出荷しに来る生産者さんにインタビューを行った。このインタビュー後,「実際に作っている場所も見てみたい」という意見が出てきたため，地域のキュウリ農家さんの畑を訪問し，A 級品として出荷できる基準の厳しさや畑で行っている工夫を知った。これらの活動を通して，「頑張っている農家さんの野菜を紹介したい」「地域の農家さんの育てている野菜を使って上田

ならではの料理を考えて色々な人に食べてもらいたい」といった思いが出てきた。

④グループごとの PR 活動



「地域の農産物の良さや農家さんの工夫を伝える」という思いを実現するために，料理グループ・動画グループ・ポスターグループに分かれ，それぞれの手段で地域の農産物や農家さんを PR することになった。その過程で町おこしに関わる大学生をゲストティーチャーとして迎え，PR 製作のアドバイスをもらいながら活動を進めた。

（３）成果と課題

インターネット上で知り得た知識だけではなく，自らが体験したことに対する興味の深まりを実感した。PR については，活動の初めのところで相手意識をはっきりさせきれずに活動に入ってしまったため，活動内容や PR 内容が曖昧になってしまった時期があった。相手意識や目的意識を常にはっきりとさせながら活動を進めることをこれからも意識していきたい。

２　自分で活動を見出し，粘り強く取り組むＹ児の姿　Ｈ小学校

（１）活動の経緯

５年生の秋から，クラスでニワトリの飼育に取り組んできた。生まれて一か月ほどのウコッケイ３羽を迎え，教室での飼育から始まった。手作りのダンボール小屋の中で動き回るヒヨコたちをかわいがりながら，だんだんと大きくなっていく様子に喜びを感じていた。冬休みからは外で飼育しようと，空き家になっていた動物小屋を整備し，寒さ対策をしつらえた。すっかり大きくなったウコッケイたちが無事冬を乗り越える様子に，子どもたちも安堵していた。

６年の４月に念願の卵が産まれた。みんなで味わい，喜びに浸った。その後生まれた卵は希望者が交代で持ち帰った。

クラスに在籍する児童会長が，立候補の公約に「生き物を大事にする学校」を掲げ，みんなが集まれる中庭を作りたいと願っていた。そこでクラスでは，ニワトリ小屋もある中庭をみんなが楽しめる場所にしようと，ニワトリ飼育をしながらの，中庭改造計画に取り組むことにした。

（２）開かずの小屋を開ける

Ｙ児は，ふと足を止めた。ニワトリのお世話，ニワトリ小屋の改良，池作りなど，友が活動に取り組む中自分は何をしようか構想している最中だった。中庭の片隅に，カギがかかり，朽ちた飼育小屋があったのだ。Ｙ児は，「先生，これって使うの？」と教師に訪ねてきた。教師は，「そうだなあ，もしニワトリ同士がけんかしたり，オスを迎えるなんてなったりした時にはどうかな？」と答えた。するとＹ児は，「じゃあ修理しないといけないね」と答えた。Ｙ児は，長い間使われなくなった飼育小屋を復活させようと取り組み始めた。

まず始めに取り掛かったのは，南京錠の取り外しだった。入り口には，鍵の所在が分からない南京錠がかかっている。まずはこれをどうにかしないことには始まらないとしたＹ児は，用途不明の鍵を一つずつ差し込み，試していった。一体，いつから使われなくなったのか見当もつかない飼育小屋。一方，鍵箱の中には膨大な数の鍵が残されていた。気の遠くなるような作業だったが，Ｙ児は一つずつ丁寧に試していった。教師もそれを見守った。だんだんとわくわくしてきた。もしかしたらこの中に残されているかもしれない。そうしたら，この開かずの扉は何年ぶりに開

くのだろう。その瞬間を見届けたいと思うようになった。Ｙ児は一つ一つ試していく。言葉は少ないが，そのまなざしからは，わくわくする気持ちと，必ず開けてやるという強い決意とが伝わってきた。

しかし，残念ながらどの鍵も南京錠には合わなかった。１００個以上は試しただろうか，合う鍵はどうやらなくなってしまったらしい。落胆した様子を見せたＹ児であったが，じゃあ次はどうしようか，と前を向いているようにも感じた。教師が，「Ｙくん，次どうする？」と尋ねると，「どうしよっかなあ。鍵が見つかるといいんだけどな・・・」と答えた。どうにかしたいと願いつつも，具体的な方策が見いだせないでいたようだった。そこで教師は，「思い切って，切っちゃおうか？」と提案した。金属用のノコギリで，鍵を切ってしまおうという提案に，Ｙ児は驚きながらも笑顔（よくこういう表情を見せる）になって，「いいの，そんなことして？」と答えた。鍵は見つからないなら，それをやるしか方法がないこと，せっかくだからＹ児がやりきったらどうかと伝えた。Ｙ児は，喜んで金属ノコギリを手にした。

ところが，南京錠はそうは甘くない。いくら切り付けてもうっすらと傷がつくばかりだった。これはどうしたものか・・・。教師が考え込んでいると，「思い切ってさ，こっちをやってもいいかな？」とＹ児が提案してきた。鍵をはめる部分そのものを切り落としてしまおうというものだった。確かにそれしか方法なさそうだ。しかも，同じ金属でも南京錠よりも柔らかそうに感じられる。

Ｙ児はそっと刃を当ててみた。わずかだが切り込みが入った。少し力を込めてみる。すると今度は確かに溝ができた。いけそうだ！Ｙ児は感じたに違いない。教師の方を見て笑みを浮かべた。

次の総合時間。教師がほかの子どもたちと活動をしていると，Ｙ児が駆けてきた。そして「先生，取れたよ！」と嬉しそうに語った。急いで駆けつけてみると，留め金がしっかりと切り落とされていた。Ｙ児が，自分の力で自分の願いを実現させた瞬間だった。教師は嬉しく感じると同時に，驚きを隠せないでいた。まさかこんなに早く切り落とすことができるとは思っていなかったからだ。ノコギリを使うことさえ慣れていないのに，金属を切り落とすことなど子どもたちの暮らしの中ではまずありえない体験である。それを，Ｙ児は，あっという間にやってしまった。切り口もきれいだった。きっと慎重に，かつ力強く刃を動かしていったに違いない。近くにいたＲ児も，その事実を知って驚いていた。一緒に切り口を見るＹ児の表情は，どこか誇らしげだった。

【切り落とされた留め具】

（３）カチカチ・・・動かないネジを回す

始めの目当てを達成したＹ児は，次に朽ちてしまっているベニヤの壁を修復しようとした。飼育小屋の壁は，内側にベニヤ板が貼られ，その上に金属のトタン板がかぶせられている。そのトタン板が錆びてめくり上がり，むき出しになったベニヤが風雨で腐ってしまっていた。この穴をふさがない限り飼育小屋としては機能しない。Ｙ児は，まずトタン板をはがすことに挑戦した。

とはいうものの，容易にはがれるものではない。トタン板は金属の柱に厳重にビス止めされおり，しかもそれが錆び付いているものだから，大人の力でも動く気配がなかった。教師が挑戦したがビクともしない。どうしようかしばし考えた後，潤滑油を用いることにした。

シュッと一吹き，浸透していくのを待った。そして，Ｙ児が力を込めてドライバーを回す。子どもの手つきとは思えないくらい，しっかりと力を込め，なおかつゆっくりとねじを回そうとする。つい焦って手を早めてしまいがちだが，Ｙ児は違った。ゆっくりとゆっくりと，まるでネジの動きを感じ取るかのようにして，ドライバーに力を込めていった。

「ギッ」という鈍い音とともに，真っ赤に錆び付いたネジがかすかに動いた。Ｙ児はさらに集

中を高めていく。押し付ける力をさらに強め，その上でゆっくりと回していった。すると，少しずつ少しずつネジが動いていった。思わず教師は見入っていた。教師も，ドライバーの取り扱いには自信がある方だったが，明らかにＹ児の方が優れていた。

そんなＹ児だから，時間はかかりつつも確実にネジを外していった。最後の一つにはさすがのＹ児も苦戦したようだった。それでもあきらめずに，粘り強く潤滑油を注してはドライバーを回し続けた。そして，初めてネジを外してから翌々週の総合の時間に，最後の一つを外すことができた。大人の手でもビクともしなかった最後の一本。正直教師はあきらめてほかの方法を模索していたが，Ｙ児はそうではなかった。Ｙ児の粘りが潤滑油の浸透を促したのかもしれない。一人でやり切ったのだった。

外れたトタン板を切り取り，朽ちたベニヤ板を取り外すと，縦３０ｃｍ，横１ｍほどの長方形の隙間ができた。これを埋めるのには，大きさを合わせた板をあてがうのが最も良いと思われた。Ｙ児は少し考えると，「これどうかなあ」と言いながらスノコを持ってきた。使われなくなったものであるため，加工することは可能である。実際にあてがってみると，やや横の長さが大きいものの，強度は申し分なかった。そこで，はみ出した部分をノコギリで切り取ることにした。

【穴をふさぐぞ！】

今度は木材用のノコギリだ。使い方と姿勢を教えると，Ｙ児は正確に切り進めていった。金属に比べたら木材は大変切りやすい。Ｙ児も，木から返ってくる手応えを感じながら，気持ちよく切り進めていった。

驚くほどきれいに，正確に切られたスノコ板は，隙間なくピタリと壁に収まった。長いこと放置されていた飼育小屋は，Ｙ児によって息を吹き返したのだった。

３　米作りの実践報告　　Ｓ小学校

今年５学年は，「米作り」をテーマに，地域のボランティアの方の協力を得ながら学習を進めてきた。塩川の地域柄，家で米を作っている子も若干いるものの，全く米作の経験のない子がほとんどであった。そうした子にとって，代かきや田植え，稲刈りや脱穀など多くの貴重な経験ができた。

① ６月５日代かき

田んぼを踏んで，土を均す。はじめのうちは恐る恐るだった子も，次第になれて，最後は泥遊び。

② ６月１２日　田植え

３本くらいずつ苗を手で一生懸命植えます。腰が痛くなりとても大変なことを実感・・・。

③ 田植えの後

水の管理や，草取り・・・わたしたちの目の届かないところで，ボランティアの方や地域の方が一生懸命お世話をしてくださいました。

様々な方に支えられ，お米になることが分かりました。

④１０月１７日　稲刈り

稲刈り鎌を使って，根元から稲を刈ります。刈った稲を５束ほどまとめひもで縛ります。

⑤１０月１７日　ハゼ掛け

７対３位に分け，左右交互にハゼにかけます。おいしいお米になりますように・・・

⑥１０月３１日　脱穀

大型機械を使って，脱穀します。あれだけあった米の粒がきれいにとれていき，驚きました。機械のすごさを感じます。昔は千歯扱きで削るように取っていたらしい・・・

⑦１２月６日　収穫祭

これまでにお世話になった方々や先生方を招待して，収穫祭をしました。オリジナルの劇を発表したり，自分たちで考えたメニュー（チャーハン・豚汁）も頑張って作りおいしくいただいたりしました。これまでの学習で学んだことを，今後の生活に生かしたいです。

子どもたちの感想から・・・

- ボランティアの方にも喜んでもらえてよかったです。農家のみなさんの大変さも分かりました。お米を一つぶ一つぶ大切にしてこれからは食べようと思いました。
- 稲刈りをしている途中で，黒い種みたいなのがくっついてちくちくして痛かったですが，無事に収穫祭を開けてよかったです。
- 毎日食べているお米は，ゆっくりゆっくり育ってできていると分かりました。食べるものは全部感謝して食べなくてはいけないのだと，分かりました。

４　生徒・地域講師 双方からのメッセージ　　Ａ中学校

Ａ中学校の「地域に学ぶ」総合的な学習の時間への取り組みの様子は，過去二年にわたり，ここに報告させていただいてきた。

一昨年度は,「地域に学ぶ」ことの“よさ”を，生徒，そして地域講師双方の立場からそれぞれ考察したが，本年度の，講師の立場から感じた“よさ”を以下にお示ししたい。

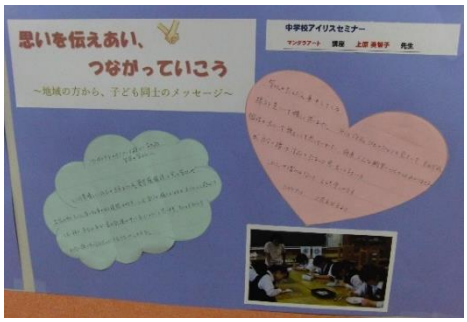
※地域の達人に学ぶ授業＜絵手紙講座＞の講師Ａさんご夫婦

「私たち夫婦には子どもがいません。ですので，この授業を引き受けるにあたって，人に教えられる嬉しさはあったものの，どう中学生と接したらよいか，正直，不安な面もありました。しかし，実際に学習を進めていく中で，子どもたちがどんなものに興味をもっているのか，または，どんな問いかけをすればよく伝わるのかなどが分かってきて，こちらが（逆に）たいへん勉強になっています」→＜地域の教育力向上の例といえるのではないか＞

続いて昨年度は,「地域に学ぶ」授業での，生徒への課題のもたせ方とその振り返りについて考察したが，本年度の，生徒の学習カードに書かれた課題の振り返りを以下にお示ししたい。

※地域の達人に学ぶ授業＜写真講座＞で学んだ生徒Ｂさん

「私は，＜一人でもカメラを使いこなせるようになる＞という課題に向かって写真を撮っていました。先生から「３分割」,「露出補正」などを教えていただき，撮ったことがない写真にも挑戦することができました。最後の授業のときには，カメラにどんな機能があるのか分かったし，自分なりに使いこなせる自信もついたのでよかったです。前にはできなかった工夫ができるようになり，写真を撮ることが一層好きになりました。(後略)」→＜課題を意識し続けながら活動できた一方，課題そのものとしてはまだ表面的ともいえるか＞



さて，本年度，Ａ中学校では，ＰＴＡの活動とも絡み「自尊感情」についての研究をおこなったところ，地域の方の目線で生徒を（継続して）評価していただくことが，生徒の自尊感情の醸成の一助となることを知った。また,「地域に学ぶ」授業（活動）が終わった後も＜思いを伝え合ってつながっていきたい＞という学校や地域の方々，更にはＰＴＡの方々の願いも含めて，今年は生徒から地域講師へのメッセージ（写真上)，同時に地域講師から生徒へのメッセージ（写真下）を書きあった。そして，そのメッセージ集を大型ボードに貼り，校内に掲示したり地域の教育懇談会の場でも掲示したりした。

今までのＡ中学校の「地域に学ぶ」学習は，全授業（活動）終了後，生徒から地域講師へお礼状を送る形で終わっていた。その意味で，一方通行の＜思いの伝達＞であったといえる。本年度は，上に示した地域講師からのメッセージをいただいたことで，生徒たちは当然のことであるが，特に自分がお世話になった講師のメッセージに見入っていた。メッセージの内容は,授業の感想だけでなく，生徒への激励の意味合いや改善を促す内容もあり，多様で興味深かったわけだが,（掲示期間がしばらく続くため）掲示期間終了後に，生徒にその感想を聞いてみたいところである。また，このメッセージ掲示が自尊感情の醸成につながったかについても検証してみたい。

５　「ことば」を育む授業の創造　　Ｎ中学校

1 学年総合的な学習のテーマ：仲間（地域）と共に生きる
単元目標 「地域で生きる人たちとつながり，私たちにできることを考えよう」

	内容	
①	地域の福祉について知る	・「ぽけっと」と「リベルテ」について，資料を読みながら調べる。 ・グループでわかったことをまとめる。 ・疑問に思ったことや分からなかったことも書く
②	地域散策	・地域散策。「リベルテ」，「ポケット」，「犀の角」を回る。可能な範囲で施設内の見学や，お話を聞く
②	地域の方の話を聞こう	・「ぽけっと」の方々を招き，講演会を開く。
④	T シャツ作成イベント 	・支援センターの方の計画によるイベントを行う。 ・進行は生徒が行う。最後はお互い感想発表をする。 ・「リベルテ」の方を講師としてお招きし，Ｔシャツデザインをする。 ・地域のイベントでＴシャツを飾っていただき，投票をしてもらう。

・今日は交流会でＴシャツを作りました。ぼくたちの班ではぽけっとの人と一緒に作り，切るのがとても上手ですごかったです。また今日のように交流をして地域について知っていきたいです。
・ぽけっとの方々と一緒にＴシャツ作りをしました。やっぱりその道を進んでいるだけあって，とても絵が上手でした。１人が頑張るのではなくて，皆と協力しながら作った方が自分の力が生かせるので良いと思いました。

③	わたしたちにできること　話し合い 「交流会の企画書を作ろう」	・イベントでの関わりを振り返り，次の交流会の企画を班ごとに作る ・各班の企画を全体で共有し，クラスで意見をまとめる。
④	交流会の準備	・企画書をもとに準備をする。
⑤	「ぽけっと」の方々と交流	・交流会の実行
⑥	振り返り	・全体を通して感じたこと，学んだことを振り返る ・地域の方々のためにできることを考える ・ＣＷＲに向けて，地域に関心を持つ

・「人は皆同じ」だと学んだ。障がいを障がいとして捉えるのではなくて，「苦手なこと」として捉えればぽけっとの方も同じだと思った。
・Ｋ君の「ぽけっとの方と私たちに違いはない」というのを聞いて，友だちと同じ様に接することが１番なのだと思った。また相手のことを知ろうと思いながら話かけたりするとその気持ちが伝わって会話も増えるので，「どんな気持ち」で接するのかも大切だと思った。ぽけっとにいる方は障がい者ではなく，少し他の人の力が必要なだけで，自分たちと同じということを学んだ。

６　私たちの手できれいにしたい　産川　　Ｋ小学校

（１）産川との出合い

「クラスでやってみたいことや考えてみたいことがあった時には，朝の会や帰りの会に，みんなでどんどん伝え合おう」。子どもたちにそう伝えたのは，４年生進級と同時に担任が変わった４月のこと。さっそく，A生から，「春になって外が温かくなってきたから，みんなで春探しに出かけたい！」と提案があった。そこで，理科の学習の時間に春の生きもの探しに出かけた。

Ｋ小学校の敷地の中にはどんな草花があるのか。生きものたちは，いま，どんな様子なのか。草花の様子を観察したり，大きなオタマジャクシを見つけたり。そんな活動をしている中で，学校の近くに『産川』という川があることを子どもたちに教えてもらった。「よし，じゃあ，行ってみるか！場所を教えて！」（教師）

子どもたちの案内の下，さっそく，『産川』へと向かった。意気揚々と橋を渡り，産川へと向かっていった子どもたち。そこで，目にしたものは…。玉ねぎや白菜等の生ごみ，割れた茶碗，絨毯，空き缶，ペットボトル，お菓子を食べ終わった後のビニール袋にパイプにタイヤ，充電器のコードやパソコンのケーブルまで…。教室に戻り，書き出してみると，黒板いっぱいに，目にしてきたゴミの名前が広がった。

「産川のゴミを拾って，産川をきれいにしようよ！！」

そうして，再び向かったのが翌日のこと。２時間かけて，川辺に落ちていたゴミを拾い，教室へと持ち帰ってきた。それでもまだ，産川のゴミの全てを拾い切れたわけではない。「まだ落ちて残っているゴミを拾いたい！」「チラシを作って住んでいる人たちにゴミを捨てないでくださいって伝えたらいいんじゃない？」ゴミが落ちているという“事実”に出会った子どもたちは，その“現状”に違和を感じ，なんとか変えられないものかと動き始めた。

（２）産川のゴミ拾いを続ける中で

ゴミ拾いを続けること，約１ヶ月。目に見える範囲のゴミの量は減ってきた…と思ったら，雨が降るたびに再び流れてくるゴミ。教室の外のベランダには，拾い集めてきたゴミが積み上がり，異臭を放ち始めていた。そんな現状を見て，動き始めたのがK生だった。

「先生，俺，市役所に電話して，相談してみた！今度来てくれるって！」（K生）

「ええっ！？」（教師）

動き始めたK生の姿に驚いたのは５月の終わりのことだった。拾っても拾っても一向に減らないゴミと，拾ってきたゴミをどのように処理したらよいのかを知りたいと願い，市役所に電話をしたところ，生活環境部廃棄物対策課というものがあることを教えてもらったそうだ。そして，そこへ電話をしてみたところ，所長さんが出てくださり，相談に乗ってくださるという話をつけてきたのだった。

翌週，クリーンセンターの土屋所長と藤沢さんが教室に来てくれた。

「どうして道にはゴミを捨てないのに川にゴミを捨てる人がいるの？」（A生）

「リサイクルできるものがあるのに，どうして捨ててしまう人がいるんだと思いますか？」（Y生）

「ゴミを処分するのにお金がかかるから川に捨てる人がいるんだと思うんだけど，そのお金って何に使われているんですか？」（S生）

純朴で真っすぐな子どもたちから挙げられる一つ一つの質問が心に突き刺さった。それは，“見えている”のに“見ようとしていない自分”。“目の前の都合の悪い事実”から目を背けようとしている“自分” がいるからなのではないか。私はそう考えずにはいられなかった。

なぜ，産川にゴミが捨てられてしまうのか。

ゴミは本来，どのように分別しなければならないのか。

１時間は子どもたちから次々と寄せられる質問に丁寧に答えていただき，もう１時間は一緒に産川に落ちていたゴミの分別をした。

誰も見ていないから，自分の手元からなくなりさえすればいいから，川にゴミを捨ててしまう

人がいること。きちんと分別がされていないゴミ袋を破り，一つ一つ手作業で分別しなおしていること。ゴミ処理にかかるお金は，ゴミを収集する方々の給料になること。疑問に対するお答えを通して，“新たな事実”に出会い，また，ゴミの分別をきちんとしてほしいという“願い”をゴミ処理の専門家のお二人から確かに受け取ったひとときだったように感じている。

子どもたちとゴミ拾いを続けてきた産川で，秋には漁業組合の方に声を掛けてもらい，ウグイの放流体験もさせていただいた。「生きものがもっともっと産川で生きやすくしたい」という願いをもっているA生。今もなお，雨が降るたびに，「また，ゴミが増えてきてるよ！」「俺も朝見に行ってきた！」と産川のことを気にかける子どもたち。人と人とのつながり，社会とのつながりを感じながら，自分たちの手で何ができるのかを探る日々を続けている。

総合的な学習の時間における児童の意欲につながる「食」の活動
～一から小麦プロジェクト～　Ｓ小学校

（１）５年生時の実践

2018 年 4 月。担任することになった 5 年 1 組の児童と一緒に，これまでの「泉の時間（総合的な学習の時間)」について振り返った。すると，動物とのふれあいや野菜を育て料理することを通して，「生命の大切さ」や「みんなと協力すること」を学んできたということが分かった。これまで，担任が総合的な学習の時間に取り組んできた活動を話した上で，5 年 1 組では，どのような活動をやりたいか尋ねると，「木で何か作る！」「秘密基地を作る！」「地下室を作る！」「幽霊屋敷，お化け屋敷を作る！」「屋上で夏祭りをしたい！」など，たくさんのアイデアが出された。そこから「何かを作りたい！」という願いを強く感じた。

ちょうどその頃，A 児の家が「パン屋」，H 児の家が「洋菓子屋」を営んでいるということを知り，パンや洋菓子の原材料である「小麦の栽培」をしてみてはどうだろうかと考えた。種から小麦を育てたり，小麦粉にして料理を作ったりする中で，身近な人たちの仕事とつながっていることを感じ，より強い意欲を持って学習に向かうことができるだろうと思った。さらに，小麦を育てたり，料理を調べていく過程で，友だちと調べたことを共有したり，相談したりして関わることや，お家の方などに聞き取り調査をして関わることも考えられる。また，今後，実際に調理をし，食べることで「私たちの小麦を，他の人にも食べてもらいたい！」という他者意識も生まれてくるなど「小麦の栽培」から活動の幅が広がるのではないかと考え，児童たちと相談し，小麦を育てることになった。

まず畑探し。畑はすぐに見つかった。R 児の祖父が，所有する田んぼを畑にしてもいいと言ってくださり，借りられることになった。同時進行で，小麦について調べた。すると，「この地域で小麦の種を蒔くのは，秋」ということが分かった。いつでも始められると考えていた小麦栽培。いきなり壁にぶつかり，1 学期の「小麦プロジェクト」は進まなかった。

夏休み明け，子どもたちが「自分たちの小麦」という想いをもって小麦の栽培をするためには，改めて対象に出会うことが必要だと考え，A 児の父親にパンを焼いていただき，全員で食べてみることにした。食べてみると，「おいしい！！」「どうして，外はカリカリで，中はフワフワなのか。」「小麦を育てて，こんなパンを作りたい！」など，実際に食べたことで感想や疑問，願いが生まれた。「自分たちの小麦でおいしいパンを作ろう！」という目標を持って活動がスタートした。

種の蒔く量を決めるため，畑の下見に行くことにした。メジャーを持参し，面積を計算した。縦７ｍ，横４６ｍ，面積３２２㎡（「そんなに広くないかなぁ（笑)」: R 児の祖父談）その広さを感じ，「広くて大変だろうけど，がんばりたい。」と前向きな意見が聞かれた。ポップコーン栽培や米づくりでの，児童たちの「対象」との関わり方から，「蒔きっぱなし」「植えっぱなし」の児童が多いように感じていた私は，このまま全員でやると同じことになるだろうと思った。「わたしの小麦！」という想いをもってもらうためには，範囲やグループを決めて，責任を持って育てることも大切だと考えた。

そこで，「2 人～5 人ほど」「悲しい想いをする人がいないように」という条件で，グループ分けを子どもたちに任せた。しかし，グループがなかなか決まらず，時間になってしまった。振り返りカードにも，「グループは仕方ないけど，楽しくやりたい。」と，なんだかすっきりしない感想が見られた。児童たちの意識が「小麦」よりも「グループの友達」に向いてしまっていたため，このようになってしまったのだと思う。

改めてグループを決めるにはどうしたらいいか。きっかけは，小麦の種にあった。小麦の種は，ホームセンターなどですぐに手に入ると思っていたが，そうではなく JA に注文をして取り寄せてもらうことがわかった。そこで，祢津のグリーンファーム（JA）さんに注文の電話をした。

担任　　「小麦の種を注文したいのですが。」

JA の方「どの小麦でしょうか。」

担任　　「どの小麦…？」

グリーンファームさんで取り扱っている小麦には，「しゅんよう（薄力粉）」「しらねこむぎ（中力粉）」「ゆめかおり（強力粉）」の 3 種類があり，小麦の種によって，それぞれ適している料理が違うことがわかった。粉の挽き方によって種類が変わると思っていた担任と児童たちは，そのことに驚くとともに，どの小麦を育てるか考えた。「先生，どの小麦を育てるの？」「みんなが作りたい料理に合った小麦を選んだらどう？だから全種類でもいいよ。」そこで，それぞれの小麦に適した料理を紹介し，児童一人一人が作りたいものを決めてから，グループ分けを行った。すると，しゅんよう（クッキーなど）4 人，しらねこむぎ（おやきなど）5 人，ゆめかおり 6 人（パン）6 人（麺，ピザなど）に分かれた。振り返りカードには，以前のようなすっきりしない意見は無く，「小麦をしっかり育て，おいしい料理を作りたい！」という意見が多数見られた。児童たちの意識が「小麦」へと向いた場面だった。次の時間は，グループで畑を耕すことになった。

9 月中旬。それぞれが耕すのに適していると考えた道具（スコップ，鍬，備中鍬）を農機具庫から持参した。前日の雨により，畑の両端が田んぼのようになっていたが，グループに分かれ，それぞれの場所を，耕し始めた。一人一人が自由に始めるグループ，一列になってやり忘れがないように進めていくグループ，想像以上のぬかるみに全く作業にならないグループなど様々であったが，「道具」への気付きが生まれていった。「スコップは，耕すことに向いていないこと」「普通の鍬だと，土がたくさん付いてしまい，その重さですぐに疲れてしまうこと」「(一番選んだ人が少ない）備中鍬が耕すことに適していること」など体験を通して気付くことができた。また，長靴や長ズボンを忘れた児童も畑仕事に適した服装があることを学んだ。

1 週間後，耕した畑に肥料を蒔いた。その後，土と肥料をしっかり混ぜるために，R 児の祖父がトラクターを使って，畑を耕してくださった。登校日ではなかったため，有志で一緒に参加させていただいた。

土の準備ができたので，次は畑作り。グループで畑の設計図を考えた。調べてきたことをもとに話し合い，自分の意見を伝えるだけでなく，お互いの意見を聞き合いながら，畝の数や畝を作る位置，畝の形などを決めていった。「種が一番育ちやすい環境を作ってあげたい。」「今までこんなに本気で畑のことを考えたことなかった。」という児童たちの言葉が印象的だった。

小麦畑の設計図を考えました。自分の意見をはっきり言えてよかったです。かまぼこか台形かで，たくさん話し合ったけど，解決できてよかったです。みんなで話し合って，協力して解決しました。チームのみんなで協力しました。

小麦のグループで集まって，「畑の設計図」をかきました。水の管理が大切なので，水の流れなどを考えてかきました。男子だけじゃなくて，女子も設計図をかきました。色も塗り，ギリギリタイムまでの間に合いました。水の工夫もできました。いよいよ畑に行って，うねを作っていき

ます。

10 月中旬，天気が不安定でなかなか畝作りができなかった畑へ。前回の授業で，グループ毎に話し合ってかいた畑の設計図を見ながら，相談，協力して畝を作ることができた。どの子も「疲れたぁ！」というくらいがんばり，中には，他のグループの畝作りを手伝ってくれるたくましい子もいた。

いずみの時間にうねづくりをしました。幅とかは，理想通りにはいかなかったけど，いい感じにできました。みんなでがんばって平らにし，形ができました。細い部分と太い部分ができたけど，ちゃんと形ができたのでよかったです。まだ，途中なので，続きもがんばりたいです。おいしい小麦ができるといいです。

うね作りをしました。最初は，どうやってつくればいいのか分かりませんでした。でも，リーダーの M さんや H さんが教えてくれました。やってみると，道具は，三つに分かれているクワよりも，一つのクワの方がいいと思いました。とても大変だったけれど，チームのみんなと協力してがんばりました。

今日一番がんばったことは，小麦のうねを作ったことです。ぼくにとっては，とてもめずらしいマメが手にできました。マメができたということは，うね作りにとても集中できた証だと思いました。だから，他の授業でも集中して，何かひらめくまでがんばりたいと思いました。

次の日は，朝からいい天気。グループ毎に必要な物を持参して小麦畑へ。昨日自分たちで作った畝に，小麦の種（しゅんよう 1 kg，しらねこむぎ 1 kg，ゆめかおり 2 kg）を蒔いた。最初は，計画通りに穴を作り，そこに 2，3 粒ずつ種を蒔いていたが，あまりの広さに，このままでは間に合わないと気付いた児童たちは，「ばら蒔き」に予定を変更。「ごま塩をふるように」を合い言葉に，時間内に種を蒔くことができた。どのくらい芽が出てくるのか楽しみにしながら，畑をあとにした。「グループの看板を作りたい」という声が聞かれたので，次の時間は，各チームで看板を作ることになった。

小麦の種まきをしました。とても大変でした。細いうねで種まきをすると，土がくずれてしまってうまくできませんでした。でも，楽しかったです。

今日は，小麦の種まきをしに行きました。心が「早くパン食べたい！」で爆発しそうでした。畑にいくと，計画を変更することがたくさんありました。なので，より大変になりました。でも，リーダーとして，がんばって種をまくことができました。二列にしてたくさん種をまくなど工夫して，一生懸命できて，すごく楽しかったです。いっぱいの小麦の種がよりスクスク元気に育ってほしいです。

今日，いずみの時間に小麦の種まきをしました。昨日できなかったうねもついに完成しました。うねは，五個以上あって，「たくさん作ったんだなぁ。」と思いました。種まきでは，「すじまき」を計画していましたが，大変だったので，「ばらまき」にしました。なので，たくさんまけました。いっぱいできるといいです。小麦の世話をがんばりたいです。

１ヶ月もすると，芽が出てきて，だんだんと牧場のようになった。ところが，「しゅんよう（薄力粉）」を撒いた畑だけ，なかなか芽が出てこなかった。種を深く埋めすぎたのか，発芽のための

水分が足りなかったのか，鳥に食べられてしまったのか，しゅんようグループの児童たちは，いろいろ原因を考えたが，わからなかった。「もし芽が出なかったら，どうしよう。」という気持ちになっていたしゅんようグループ。4 人の児童たちの「私たちのしゅんよう」という想いは強く，担任は，もしもの時は薄力粉を購入しようかと考えていたが，簡単に提案できる雰囲気では無かった。しかしながら，「自然は思い通りにいかない。だからこそドキドキワクワクする。」という経験ができていることに，嬉しさも感じた。

今日，いずみで畑に行きました。他のグループの畑は，たくさん芽が出ていてすごかったです。でも，わたしのチームは，芽が全然出ていませんでした。ショックでした。何が悪かったのか，いろいろ考えました。一つ目は，他のチームは，種を全部蒔いたけど，私のチームは半分しか蒔きませんでした。量が少なかったのかなと思いました。二つ目は，土をかぶせる量が少なくて，鳥に食べられたのかなと思いました。もし，タイムマシーンがあったら畝を作る前に戻って，一からやり直したいです。たくさん芽が出るといいです。

12 月，1 月，2 月の寒い時期は，「麦踏み」をした。これまで作物を育てたことがあった児童たちだが，「踏んで育てる」という経験はしてこなかったため，初めは，「本当に踏んで大丈夫なのか？」と心配していた。しかし，調べた栽培ごよみに「踏むことで根が強くなる」と書いてあったことを信じ，麦の芽をせっせと踏んだ。しっかり踏みたいと願った児童たちの中には，おんぶして踏む姿もあった。3 月は，「追肥」のために肥料を撒いた。

12 月。今日は，小麦の伸び具合がすごくてびっくりしました。前回はまだ，１～２㎝しかなかったけれど，10 ㎝くらいあって驚きました。これからどんどん寒くなっていくので，少し心配だけれど，その季節の植物なので大丈夫だと思います。生長の速度では，２月ぐらいからなので，いつ伸びが速くなるかが楽しみです。

（２）６年生時の実践

2019 年 4 月。新年度の六年生は，各行事に忙殺され，ようやく畑に行けたのは 5 月に入ってから。小麦がぐんぐん伸び始めており，穂も出てきた。なかなか芽の出なかった「しゅんよう（薄力粉）」も，他の小麦よりはゆっくりであるものの，しっかり伸びてきていて，しゅんようグループの児童たちは大喜びだった。

6 月になると，小麦の色が変わってきた。まるで秋のような風景。これが「麦秋」なのだと知り，国語の教科書で習った知識と体験がつながった。この時期には，スズメたちが畑に来て，小麦を食べてしまうようになったので，防鳥ネットを張った。また，雨の季節になり，雨が多いと「穂発芽（穂のまま発芽してしまうこと）」になってしまうこともあると知り，心配しながら晴れの日を待った。

6 月下旬。待ちに待った小麦の刈り取りをした。全く芽が出ずに落ち込んでいた「しゅんよう」グループの小麦もしっかりと実り，小麦がしっかり生長してくれたことへの安堵と喜びを感じながら収穫していた。「しらねこむぎ」のグループは，作業の大変さから，昔の人の苦労を感じていた。「ゆめかおり」のパングループは，協力して行い，とても速く刈り取りを終えた。ラーメングループは，リーダーが積極的に働いていた。ピザグループは，少人数でコツコツとがんばっていた。天気にも恵まれ，３時

間かけて，全ての小麦を収穫した。途中，隣の田んぼに落ちた児童や稲刈り鎌で手を切ってしまった児童もいたが，大きなケガもなく終えることができた。活動の中で，自然と手を貸す姿や協力し合う姿が見られ，児童たちの心根の優しさを感じた。また，刈り取りの当日は，R 児の祖父が作業を手伝ってくださった。お米を入れる用の袋を貸してくださり，25 袋もの小麦を学校まで運んでくださった。また，T 児の父親にも小麦栽培についての情報をたくさん教えていただき，とても助かった。そうしたことから「自分たちだけではできなかった。」という感想を多くの児童が持ち，感謝の気持ちを強く感じていた。何度も通った畑への道。片道 20 分ほどの距離だったが，みんなの体力も育ててくれた。

刈り取った小麦は，そのままにしておくとカビてしまうため，学校のプレイルームにブルーシートを広げて干した。穂だけを刈り取ってきたつもりだったが，長い茎が付いたままの小麦がかなりあった。干してから，R 児の祖父の畑で脱穀をやらせてもらう予定だったため，もう一度袋に入れることを考え，茎をみんなで切ることにした。しかし，やってみると，とても時間がかかることがわかった。ありがたいことに，通りかかった 4 年 1 組の児童もお手伝いをしてくれたが，まだかなりの量が残った。そこで，茎のついたものは，手で脱穀をすることにし，ちょうど授業参観日もあったので，保護者にも一緒に脱穀をしていただいた。ゴム手袋をして，手の間にはさんで穂をこすり，小麦の実を脱穀した。総勢 40 名で 1 時間行ったのだが，小さなボウル一杯分にしかならなかった。とても人の手ではやりきれないことが分かり，R 児の祖父に機械で脱穀していただいた。支えてくれる人のあたたかさと機械のすごさを感じた。

脱穀した小麦を計ってみると，「しゅんよう 15 kg」「しらねこむぎ 19 kg」「ゆめかお 34 kg」の小麦が収穫できた。夏休み中に小麦をしっかり乾燥させ，夏休み明けに製粉をすることにした。石臼で行うには，量が多すぎるため，製粉できる場所を探した。「コイン精米所」のように「コイン製粉所」があるだろうと考えていたのだが，周辺地域には存在しなかった。見つからずに困っていると，この時もまた，保護者の助けをいただいた。T 児の父親が自分の家で育てた小麦を製粉するついでに，望月の製粉所へ持っていってくれたのだ。また，周囲の人たちに助けられ活動が進んだ。粉になった小麦は，「しゅんよう 10 kg」「しらねこむぎ 15 kg」「ゆめかおり 22 kg」になった。みんなでパンを食べ，「自分たちの小麦でおいしいパンを作ろう！」という目標を持って活動をスタートしてから 1 年が経とうとしていた。

小麦粉を使って何を作ろうか。各グループで，料理について具体的に調べ，作る料理を決定した。しゅんよう（薄力粉）グループは，「蒸しパン＆クッキー」。しらねこむぎ（中力粉）グループは，「おやき」。ゆめかおり（強力粉）パングループは，「メロンパン，フーガス，クロワッサン，シュリッペン（ドイツのパン）」。ラーメングループは，「みそラーメン」。ピザグループは，「ミックスピザ」。全てを同じ時間に作るつもりだったが，児童たちは，「自分のグループ以外の料理も食べたい！」と考え，それぞれのグループの児童が講師となって，順番に全ての料理を作ることになった。調理方法を調べ，何人前作るかを話し合った。「小麦粉が減ってしまうから自分たちの分だけでいい。」と言う児童もいたが，「これまでお世話になった方や先生たちにも，お礼に食べてもらおう！」ということになった。

最初に作ったのは，しらねこむぎの「おやき」。5 人のしらねこむぎグループの児童が講師になり，5 つの班に分かれておやきを作った。しらねこむぎグループのほとんどの児童が，自主的にあらかじめ家でおやきを作ってポイントを確認していたので，とてもスムーズに調理ができた。児童の感想には，「焼いているときにちょっとずつ見ていないと，焦げてしまうことが分かり，勉強になった。」「火加減や蒸す時間が少し難しかったけれど，完成したときとても嬉しかった。」という自分で調理して感じたことや，「協力してできて，楽しかった！」という仲間と一緒に活動するよさ，「家でも作ってみたい。他の料理も早く作ってみたい。」というこれからの活動への意欲などが見られた。講師になり，おやきの作り方を友だちに教えたしらねこむぎグループの児童は，特に自信や達成感を感じたようだ

った。担任が学級通信に「みんなの想いが形になった活動」と書くと，「先生，みんなの想いと努力が形になった活動でしょ。」と書き加える程に，自分たちのがんばりを強く感じていた。

次は，しゅんようの「蒸しパン＆クッキー」。4 人のしゅんようグループの児童は，事前にクッキー班と蒸しパン班に分かれ，家で調理の練習をしてきた。家で作った時よりも，クッキーの生地が柔らかくなりすぎてしまったり，蒸しパンが膨らまなかったりして，思い通りにいかない場面もあったが，それらは，全てしゅんようグループの児童たちが自分で試しておいたからこそ分かる「ちがい」だった。振り返りカードには，「小麦すごい！」という短い感想があった。その言葉には，「こんなにもいろいろな種類の食べ物になる小麦はすごい！」という調理活動をしたからこその想いが込められていたのだと思う。

3 回目の調理は，みそラーメン作り。残念ながら，講師になるラーメングループの児童は，誰もあらかじめラーメンを作っていなかった。グループの児童たちにもう少し働きかけをすればよかったと反省した。しかし，児童たちは，ラーメングループを責めることも無く，それぞれのグループでやり方を考え，友だちと協力しながら，ラーメンを作っていた。児童たちの，「優しさ」と「たくましさ」を感じた。

昨日と今日で，ラーメンをつくりました。最初はこねました。その後，足で踏みました。こねるのは上手くできたし，初めて足で踏んだけれど，いい感じにできたのでよかったです。そして今日は，麺を切ってゆでたり，スープを作ったりしました。スープ作りは，簡単だと思ったけれど，量とか間違えると，意外と大変でした。でも，上手にできたのでよかったです。自分たちで，ここまで全部作ったラーメンは最高においしかったです。

ラーメン作りがんばりました。ちょっとソバみたいだったけれど，おいしかったです。ちょっと柔らかかったです。ラーメン作りは，初めてだったので，ワクワクしたし，班の人と協力できてよかったです。

ラーメン作りがありました。グループで，役割を決めてスムーズに進みました。味は，ザ・小麦！という味で，今までにないおいしさでした。「みんなで協力したからこそ！」だと思います。

次は，4 種類のパン作り。そして最後にピザ作りが待っている。（2019 年 12 月末）

（３）一から小麦プロジェクトを振り返って

そもそも小麦の種すら見たことも無かった私が児童たちと共に「小麦」に惹かれ，この活動に取り組んだのは「縁」だったと思う。これまで，米作りの経験はあったが，全て JA の方が発芽させてくれた苗を植え，その生長を見守るという活動だった。本当に一から自分たちの手で，畑を準備し，種を蒔き，発芽させ，麦を踏み，除草し，防鳥ネットをかけるなどの世話をし，収穫をしたのは初めてだった。当初，私は，A 児や H 児の保護者に協力していただき，プロに作り方を教えていただきながら，パンやお菓子を作った上で，経営者である二人の保護者の話を聞き，児童たちが将来の夢を考えるきっかけになればいいなと考えていた小麦の活動だったが，実際の活動は，「自分たちの手で全てを作る！」という活動になった。だからこそ，自分たちが育てた小麦を使って，自分たちの手で調理したものを食べた後の児童たちの喜びはひとしおだった。ある児童は，「自分たちで小麦を種から育てて，こんなにたくさんの料理を作ったのは，滋野小で俺たちが初めてじゃない？」と嬉しそうに何度も言っていた。児童たちは，強い達成感を得たと同時に，多くの人に支えられて活動ができたことへの感謝の気持ちをもっていた。

「食べる」という目標は，活動の大きなエネルギーになるということを改めて感じた。また，全員で同じ小麦を育てるのではなく，少人数で３種類の小麦を育てたことで「私の小麦」というこだわりをもって活動する児童の姿を見ることができた。しかしながら，中には，責任感があまりなく，活動が他人任せになっている児童もいた。活動が自分のものになっていない児童に対して，どのような働きかけをしていくのかがこれからの課題だ。

総合的な学習の時間は，教師にとっても「おもしろいもの」でありたい。

これからも赴任地での縁を大切にしながら，児童たちの半歩前に立ちながら学習がスタートし，最後はその背中を見守りながら学習が進んでいくような総合的な学習の時間を児童たちとつくっていきたい。

Ⅳ　令和元年度委員名簿

嘉生　直樹　（神科小）
宮澤　紀夫　（青木中）
大藏　英治　（川辺小）
清沢　利哉　（塩川小）
小林　実季　（第二中）
寺島　純一　（滋野小）
田中　誠　　（東小）